

人権教育に関する特色ある実践事例

| | |
|-------|--|
| 基準の観点 | 学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例 |
|-------|--|

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

三重県志摩市

学校名

志摩市立磯部小学校

学校のURL

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】全学年各2学級、【特別支援学級】なし、【合計】12学級

児童生徒数

【全児童数】331人（平成23年12月22日現在）
（内訳：1年生51人、2年生37人、3年生55人、4年生59人、5年生62人、6年生67人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】（学校経営の改革方針）
子どもたちが、生まれや育ちに左右されることなく学びを獲得できる学校づくり

人権教育にかかる取組の全体概要

磯部小学校では、数十年前より子どもや保護者のくらしの中にある差別の現実に学び、差別を解消し人権を確立していく教育内容づくりに取り組んできた。「立場の自覚」「反差別の仲間づくり」「部落問題学習」などとともに、「進路・学力保障」も大きな柱として取り組んできた。しかし、かねてより指摘されている「ふたこぶラクダ」「学力格差」の実態は明らかで、依然として大きな課題である。

そこで、磯部小学校では、「検証軸の子が生き生きと学習する授業の創造」を大切に、これまで培ってきた同和教育、人権教育の取組をベースにしながら、日々の授業改革に取り組んでいる。

3. 特色ある実践事例の内容

人権尊重の視点に立った学校づくりの取組

（1）取組を始めたきっかけ

磯部小学校は、ここ数十年間「差別の現実に深く学ぶ」とともに、厳しい生活背景の中で、「踏ん張って生きようとしている事実気づく」取組を進めてきた。そ

の結果、自分に自信が持てる、安心して学校生活を送ることのできる子どもが増えたと考えてきた。

しかし、一方で次のような子どもたちの実態もあった。

「大すきわたし」(生活科)の授業で、Aを大切に思う父親の姿についてクラスで考え合った。授業中ずっと笑顔を見せていた。授業後には、「私のお父さんのこと、分かってくれた？」と参観していた教職員に話しかけている姿もあった。

別の日の算数の授業でAは、自分から進んで手を挙げ、いつもよりも大きな声で発表をしていた。ところが、隣の席の子どもに「ノートを見たやろ」と言われ、泣き出してしまった。泣き出しているのに、周りの子どもたちは関わろうとすることはなかった。その後は、ずっと下を向いたまま顔を上げることもなく、授業は終わってしまった。

授業反省会で、Aの日々の授業の様子を振り返ってみたとき、周りの子に「教えて」と言えずに、黙ったままいることや、自分のノートを見られまいと隠すしぐさがあることに、担任はあらためて気づいた。

担任だけではなく、他の教職員の授業を振り返っていったとき、「自分の生活を語り合う時には、生き生きとした表情を見せるのに、なぜ、ふだんの授業では元気がなくなるのか」「今行っている授業が、本当に全員のものになっているのか」「『仲間』は大切だと言いながら、授業中に困っている隣の友だちに関わろうとしないのか」等の問題点が出された。

そして、何よりも私たち教職員自身が、「人権学習をどれだけ熱心にやっても、日々の授業での指導が人権上配慮を欠いていたら意味がない。日々の授業をはじめ、全ての教育活動の中で子どもの人権を大切にこそ、人権教育である」ということを意識しきれていなかった。そこに私たちの矛盾が見えてきた。

(2) 課題克服のための取組

教職員の共通理解を深める

(ア) 検証軸の子の設定

「仲間づくり」の取組で核になる子どもで、かつ授業に意欲的になれない状況に置かれている子どもを中心に据えて取組を進めていこうと考えた。私たちはその子どものことを「検証軸の子」と呼ぶことにした。そして、「検証軸の子」を通して、日々の授業をはじめ、すべての教育活動の場において、学校の取組を検証することにした。

(イ) 授業改善の手立ての明確化

学習環境の整備

- ・ 授業規律の確立

子どもどうしの関わり

- ・ 複数、グループで考える場の設定

多様な活動を保障できる場の設定

- ・ 具体的操作活動の導入

日々の授業の在り方を検証する

(ア) 授業参観週間の設定

- ・研究授業 年7回
- ・授業参観週間 年6回（1回につき2週間）

授業参観週間（教職員間で授業参観）

時期 4月、5月、6月、10月、11月、2月に2週間ずつ

方法【授業を見合う】

- ・授業を公開し、教職員間で授業の参観を行う。
- ・中学校区の教育機関へも参加を呼びかける。
- ・教職員は、期間中に最低2回以上他のクラスの授業を参観し、意見を書く。
- ・意見は参観週間後、冊子にして配付する。

【外部講師を招く】

- ・それぞれの参観期間中に、外部講師を3日間招聘する。（1日平均4時限、授業を参観いただく。）
- ・昼休みや放課後等に、講師から個別指導を受ける。



（イ）指導・助言団の継続的な関わり

- ・大学講師、市教委・県教委指導主事等で構成
- ・指導、助言の観点を統一

4. 実践事例の実績、実施による効果

（1）授業規律の確立 ～始業式までが勝負～

2008（平成20）年度、クラスによって子どもたちの学習態度に大きな差があった。すべての子どもたちが落ち着いて、授業に集中できる環境をつくっていくためには、学校全体で授業規律を確立していく必要があった。そこで、2009（平成21）年4月2日、授業規律についての校内研修会をもつことにした。

「こんな話し合いは、はじめて」～研修担当のふり返し～

まず、それぞれの教師が、日頃大事にしている授業規律を紙に書いて出し合った。そうしたら、なんと123もあがってきた。「チャイムが鳴ったら席に着く」「机の上に不必要なものは出さない」「指名されたときは返事をする」等。出し合ってみてはっきりしたのだが、中には「聞くときの姿勢、気持ちが大事」や、「楽しく学べる雰囲気」というようなものもあった。「授業規律」というもののとらえ方もみんな違っていった。

研修会では、3つのグループに分かれて、「なぜそのことを大事にしてきたのか」「大事にして指導してきてどういう成果があったのか」を一つずつ話し合った。この時間が効果的だった。形にはめこむために授業規律を決めるのではなく、その授業規律が子どもの成長をどう保障するか、一人ひとりの子どもにとってどういう意味を持つのかを話し合えたように思う。

また、この話し合いを通して、教職員全体で以下のことを確認した。

子どもに要求することは、まず教職員自身から実践する。

授業規律のある授業が、良い授業とは限らない。しかし、良い授業には授業規律がある。

子どもたちに授業規律を要求するということは、逆に子どもたちから、私たちの授業に臨む姿勢、授業内容が問われているということである。

この年以降、教職員間で授業規律を確認し合い、すべての学級において年度当初から定着させていくために、4月に授業参観週間を設定した。あわせて全体での研究授業も行っている。

こういった取組を続けてきた結果、本校に視察に来られた方々から、「どのクラスを見ても落ち着いて、集中している」「話を聞こうとする姿勢がどのクラスでも見られる」という声をいただいている。また、全クラスで授業規律を大切にしてきたことが、全校集会で見せる子どもたちの姿にもつながっている。

(2) 授業参観週間 ~子どもが主役だったんだ~

授業参観週間に外部講師を招き、全体の場で、あるいは個別に指導・助言をいただいた。4月の授業規律の確認から始まって、常に参観し合う場があったことが継続的な取組に結び付いたと考える。



その中で、それぞれの教職員が具体的に学び、少しずつ意識が変わっていった。

「今日もしゃべりすぎ」 (T教諭のふり返り)

2年前の5年生を担当しているときから、お互いの授業を見合う授業参観週間が始まった。

授業参観週間では、外部講師や同僚から「発問は、短く。明確に」「とめ直しはしない」「子どもからの質問には教師が答えずに、まず子どもに考えさせる」と、指摘されることが多かった。

算数の授業でも、チームティーチングに入っている同僚から、毎日のように授業後に「今日もしゃべりすぎ」「子どもがかわいそう」などと指摘を受けた。日が経つにつれ、その同僚からは、授業中に目で合図を送られたり、近くへ来て「しゃべりすぎ」「短く」とささやかれたりするようになってきた。正直、どうしてここまで言われなければならないのかと思うこともあった。でも、他の同僚の授業を参観していると「発問のとめ直しをしよう。ちょっとこの説明いらんやろ...」ということも感じ始めていた。

そんな時、授業参観週間で見た同学年の授業が印象的だった。その授業を見て「ほんま、担任のしゃべりが少ないなあ」と思った。逆に、教師の言葉が少なすぎて、「子どもが不安になるのでは...」と思うくらいであった。「子どもたちでやりとりをする」ということが、少し分かってきた。

授業では、写真・グラフ・資料・数直線などを使ったり、具体的操作や動作化を取り入れたりしてみた。公開研究授業で、理科の「ふり子のつりあい」の授業をした。てんびんの左右におもりをつるして、「うでの長さ」と「おもりのつるす数」の関係を考え合う授業だった。具体物を使って、検証軸の子が、班の子たちと相談したり、前で意欲的に自分の考えを説明したりしている姿があった。その授業後に参観者が、ある子どもに「理科の授業は好き？」と尋ねると、その子どもは、うれしそうに「分かるようになるから楽しい」と答えたという話を聞いた。

【授業参観週間の意見より】

一見手なぶりをしているように見えた検証軸の子が、前にやってきて、平行四辺形を丸めてみると、向かい合う辺がぴったり重なることを説明し出した。その方法でやるよう指示したところ、一気に集中が増した。子どもの気づきをうまく引き出した場面だった。

検証軸の子どもが問題をやり始めてからしばらくして、隣の子どもに相談している場面があった。後で聞いたら、「途中から急に答えが大きくなったので不安になって確かめた」と言っていた。隣の子どもに分からないことを聞ける良い関係だ。

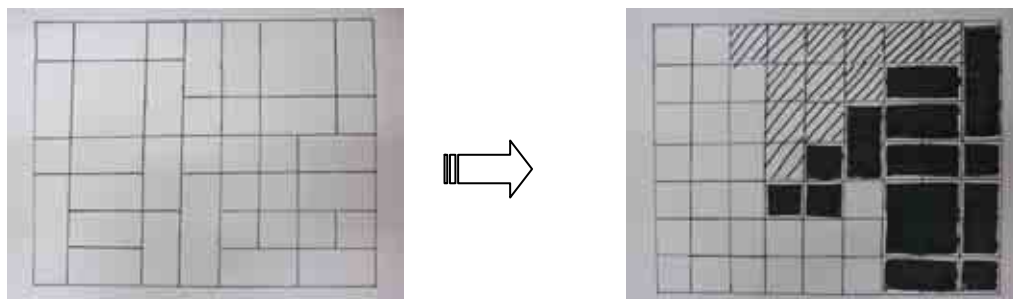
(3) 子どもの授業意欲を高める ～具体的操作活動で生き生き～

子どもにとって言葉を概念で伝えるような授業は、考えることが難しいことがある。具体的な操作活動を取り入れることで、生き生きと考える場面が増えてきた。以下はその一例である。

【4年生の算数「広さを比べよう」より】

前時、導入で算数の教科書にある広さ比べゲームを行った。担任は、子どもたちから「どちらが広いのかわからない」という声があがるのを待っていた。

ある3人グループから「誰が勝ったか、わからない」という声があがった。担任はその図をプリントして、次の時間に全員に提示し、「誰が勝ったんだろう?」と問いかけた。この後、子どもたちの作業は20分間続いた。



子どもたちはそれぞれ、手元の図に補助線を入れたり、大中小が何個あるかという表を作ったり、補助線で区切られた小さな正方形を並べ替えたりし出した。

Bは、最初何をしたいのかわからなかったが、大きさには関係なく、まずはいくつあるか数え始めた。しかし、途中で、大きさの違うものを数えることに違和感を感じ、中断した。隣の子も、どうしていいかわからずにいたので、しばらく2人で相談していた。

すると、前に座っている二人の子が、それぞれ、図に補助線を入れる作業を始めていた。その内の一人の子が、後ろを向いて、「線をいれたらいいんじゃない?」とアドバイスをした。Bも隣の子も補助線を引き始めた。同じ大きさのマス目が並んだのを見て、その数を数えれば大きさを比べることができることに自然と気づいていった。この20分間、Bはとても集中して学習に臨んでいた。発表の場面でBは、自分から挙手し、「私は、全部小さくしました。そうすると27個、24個、12個になりました」と答えた。

この授業のあと、Bは家へ帰ってから、妹を相手に2日続けて広さ比べゲームをした。じゃんけんでは妹が多く勝ったので、妹は「私が勝った」と主張した。そこで、Bは補助線を入れて小さな方眼に直し、自分が勝ったことを妹に説明した。

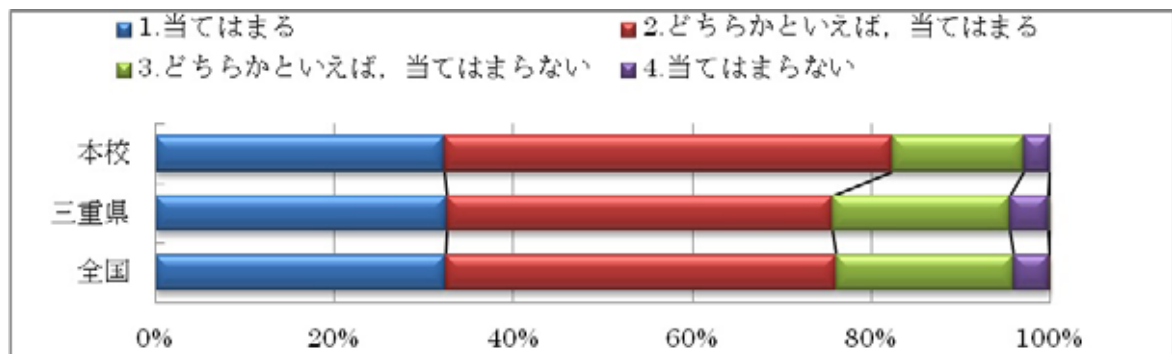
そして、自主学习ノートにゲームの様子を書いて、翌日提出した。Bの自主学习は計算問題などを書いてくるが多かったが、このように授業で学んだことを家で繰り返したことは初めてのことだった。

(4) 全国学力・学習状況調査より[2010(平成22)年度]

～変わりつつある子どもの意識～

このように、授業参観週間で指摘されたことをもとにしながら、教師が具体的操作等を入れたり、子どもたち自らが考える時間を保障したりしていくことによって、子どもたちの授業に対する意欲は高まってきた。

全国学力・学習状況調査の「普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか?」という設問の回答は、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると、全国・三重県平均を上回っている。



「国語が好きですか?」という設問では、肯定的な回答が増え、初めて全国平均を2.0ポイント上回った。ただし、「国語の授業内容がよく分かるか」という点では、まだ課題も残っている。

また、「算数が好きですか?」という設問に対しては、まだ全国平均を7.9ポイント下回っている。しかし、「算数の授業内容がよく分かりますか?」の肯定的回答が、初めて全国平均を1.4ポイント上回った。

5. 実践事例についての評価

(1) 授業改善の取組をふり返って

磯部小学校が授業改善に取り組み始めて4年目になる。授業を見合い、お互いに指摘し合うことや、外部講師等の継続的な指導を受け、多くの気づきがあった。

「人権教育の指導方法等の在り方について[第三次とりまとめ]」の中に「人権尊重の精神に立つ学校づくり」があげられている。「人権教育の推進にあたり、日々の授業における活動の一つ一つが、人権尊重の雰囲気醸成の上での重要な要素となる」さらには「自己存在感を持たせる」「共感的人間関係を育成する」等の視点があげられている。それらは私たちが、授業改善を通じて実感してきたことと重なることでもある。

(2) 外部講師より

授業改善の取組に継続的に関わっていただいている外部講師の方から、以下のような評価をいただいている。

子どもたちが授業に対して積極的になってきた。そこには、年々定着してきた学習規律も大きく関係している。また、「仲間づくり」を通して、学級集団をつくっていくスキルもアップしている。さらに、先生たちとの会話から、子どもと保護者が、学習について話し合う機会が多くなってきているように感じる。こういうことが、保護者の学校への信頼感を高めていくことにつながっている。

(3) 今後に向けて

今日の社会状況の中で、「厳しい生活状況におかれた」子どもは増えてきている。だからこそ、私たちが大切にしてきた「生活を語り合う」取組や授業づくりをより一層丁寧に、そして日常的・継続的に進めていかなければならないと考える。

小学校での学年間はもちろんのこと、中学校・高等学校、さらには、家庭や地域等とも連携を図りながら、子どもたちに将来を切り拓く力を保障していくような取組を進めていきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

志摩市立磯部小学校

「差別の現実に深く学ぶ」という視点を一貫して大切にし、人権確立のための教育実践を数十年間にわたって蓄積してきた点に特徴がある。とくに、「(社会的)立場の自覚」「反差別の仲間づくり」「部落問題学習」など、同和教育の文脈で人権尊重の学校づくりを推進してきた取組が注目される。すべての教育活動において子どもの人権を大切にするために、「検証軸の子」(仲間づくりの取組において核となる子ども)に焦点をあて、その子どもたちの学習意欲や生活規律を高めるための実践を通じて、すべての児童の学習意欲や人権尊重の雰囲気を育もうとしていることは、「第三次とりまとめ」の「人権尊重の精神に立つ学校づくり」を具現化するものであり、児童の学習意欲が実際に高まっている事実は、確かな成果があがっていることを示している。